

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00710

研究課題名（和文）子どもの日本語教育の実践・研究のための「プラットフォーム」構築に関する研究

研究課題名（英文）Research on the construction of a "platform" for the practice and study of Japanese language education for children

研究代表者

齋藤 ひろみ (SAITO, Hiromi)

東京学芸大学・教育学研究科・教授

研究者番号：50334462

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：多様な言語文化背景をもつ子どもの増加により、その日本語指導・支援のニーズは一層高まっている。本研究では、その推進のために、子どもの日本語教育の実践・研究のためのプラットフォームの構築を試みた。「子どもの日本語教育研究会」として実践者と研究が交流する研究大会・ワークショップ等を対面とオンラインとで実施してきた。また、ウェブサイトを経営し、リソースを提供している。大会等には毎回200人を超える参加者があり、多様な実践・研究が相互作用する場が構築され、アイデアと視点は、次なる実践・研究の示唆となっている。プラットフォームに求められる多様性・相互作用・継続性を実装することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校・地域において、子どものための日本語教育の場を構築するには、関わっている多様な専門性をもつ者が学び合う場をつくり、相互に専門性を広げ、深め、実践的課題を解決する力を高めることが必要である。本研究は「子どもの日本語教育研究会」の運営を通じて、この社会的ニーズに正面から応えて来た。

学術的には、子どもの日本語教育の課題について、多面的な検討を進めてきた。特に「ことばと参加」「実践研究のあり方」に関するプロジェクトを発足させ取り組んだ。その結果、ことばの教育実践においては、個と社会との相互連環と相互作用、そしてプロセスとして本質的問いに迫る学びのサイクルを形成することの重要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The number of children with diverse linguistic and cultural backgrounds is increasing, and the need for Japanese language instruction and support for them is becoming even greater. In this study, we sought to establish a platform for the practice and research of Japanese language education for children with the aim of enhancing the quality of such education. We have held conferences, workshops, and other events for practitioners and researchers to exchange ideas both in person and online as the "Society of Japanese Language Education for Children". Furthermore, we maintain a website and provide resources. Each conference and other event attracts over 200 participants. A platform has been created for diverse practices and research to interact, and the ideas and perspectives have provided suggestions for the next phase of practice and research. The platform has been able to embody the diversity, interaction, and continuity required of a platform.

研究分野：日本語教育学

キーワード：子どもの日本語教育 プラットフォーム 実践と研究の往還 文化間移動と適応 第二言語としての日本語・母語・第三の言語 学習参加とことば 実践者の語りと交流 教育コミュニティ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 外国人児童生徒教育施策の動向

本科研の研究開始時の令和 30 年度当時、外国人児童生徒等教育に関する施策は大きな転換期を迎えていた(齋藤・菅原 2017, 石井 2017)。平成 26 年には、取り出しの日本語指導を「特別の教育課程」として編成・実施することが可能になり、日本語教育が公教育に明確に位置付けられた。また、平成 28 年には有識者会議報告「学校における外国人児童生徒等に対する教育支援の充実方策について」(文部科学省)で、教育・指導の充実が求められ、体制整備・人的配置と人材養成の重要性が指摘され、「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」の改正により、加配教員の基礎定数化(児童生徒 18 人対教員 1 名)が決定した。

この施策のうねりを教育・支援の実質的な充実に向かわせるには、二つの大きな課題があった。第一に教育・支援者の成長のための環境づくりである。子どもの日本語教育に関する専門性は、教員養成・現職教員研修においても、日本語教育の分野においても十分には培われていなかった。また、学校では担当者が数年単位で入れ替わるために、それぞれのベクトルで進められる実践は断片的であり、教員の相互研鑽の機会も少なかった。一方、多様な文化背景の子どもの課題も、貧困、家族関係の複雑さ、特別なニーズ、進学・就業の問題など、複雑さを極めていた(荒巻他 2016, 池上 2017 他)。関連する研究領域も心理学から教育社会学、福祉・医療、そして言語・移民政策までと広範な領域に及び、それぞれに検討が進められてはいたが、教育実践も研究も残念ながらメスティックで局在化した状態であった。課題が学際性を持つ教育に関わる研究であるにもかかわらず、実践と研究の間の関連も見えにくく、教育現場の各所で耳にする声は、ともに課題に向き合う仲間がいない、学ぶ場がないというものであった。

(2) 日本語教育の内容・方法に関する指標

第二に、国内の子どもへの日本語教育が始まって 30 年を経てもなお、その教育・支援内容についての国としての明確な指標は示されていない。そのため、それぞれの現場が、その教育条件や論理に基づき、「何をゴールに、何を教えるのか」を決定して実施していた。子どもたちの日本語教育は、受け入れ体制、教員・支援者の専門性、文化的多様性に関する認識、地域の支援状況において地域・学校間に大きな違いがある。結果として、日本語のみならず教科指導・母語支援まで手厚い対応のある集住地域・学校から、手の空いた教員がいれば対応するといった「その場限り」の対応しかできていないところまで、その教育・支援には格差が広がっていた(浜田・松本 2017)。この状態を変えるには、課題の構造化と実践・研究の体系化が急務であり、そのための基軸となる「ことばの教育」の考え方を議論し、広く、共有することが必要であった。

2. 研究の目的

本研究では、日本語教育・支援の質を高め、多様な文化背景をもつ子どもの言語学習権を保障するために、各々に進められてきた教育実践と研究との相互作用的な展開を生み出す「プラットフォーム」(以下、プラットフォーム)の構築を目的として研究を進める。その創造性と独自性として、以下を想定した。

<創造性>

「プラットフォーム」とは、土台や基盤、場を意味するが、2000 年代より、IT 分野の深化でビジネスモデルとして活性化してきた。その「場」は、多くの参加者がそこで関係性を強化しつつ、多様なニーズに対応するように複数のサービスを展開・更新できることが特徴である。現在も日本国内の多文化背景の子どもの日本語教育に関する HP は少なくない。各々が開発した教材や実践事例等が掲載されている(文部科学省「かすたねっと」等)。ただし、リソース蓄積型であり、アクセスは可能であるが、そこに参与し、双方向でリソース活用や更新・開発をすることは困難である。その状況は、対面での実践の報告・研究会でも同様で、提供者と消費者という役割の固定した構図がある(図 1 左)。

そこで、多様な文化背景をもつ子どもの日本語教育の実践者・研究者が集う対面の場面とネット上の空間の両方に多様性・相互作用性・更新性・継続性をもつプラットフォーム型の仕組みを構築する。(図 1 右)

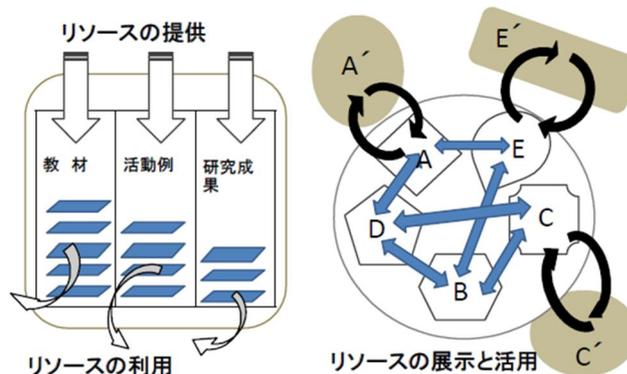


図1 蓄積型リソースボックス(左)とプラットフォーム型リソース交流空間(右)

< 独自性 >

多様な文化背景をもつ子どもの実践と研究に関わるエージェントに、プラットフォーム型の場を提供することで、相互交流を図ると同時に、そこに、新しい実践・研究の方向性や共同体が生まれる場を提供する。特に、これまで日本語教育領域では協働が難しいとされてきた学校・教育委員会の実践者を巻き込み、学校教育文脈と地域教育・支援文脈に、関連領域である異文化間教育、バイリンガリズム、社会福祉等の研究を介在させることによって、連続性を創ることに独自性がある。(図 2)

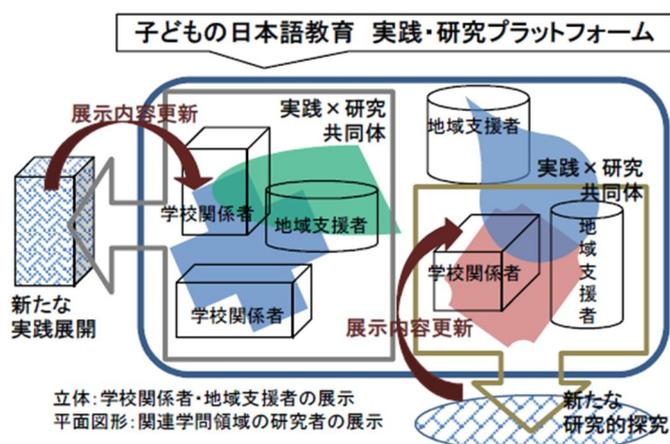


図2 プラットフォームに期待される相互作用
実践⇔研究×学校⇔地域

3. 研究の方法

本研究では子どもの日本語教育実践・研究のための「プラットフォーム」構築を次のように進めてきた。

(1) 「子どもの日本語教育研究会」(2016 年度発足) の活動を通して、プラットフォームを構築する。本研究グループが中核となって運営している「子どもの日本語教育研究会」の活動(大会・ワークショップ・研究会) を実施し、多様性・相互作用性・更新性をもつ場をプラットフォームとして創る。

(2) (1) の活動への参加者に対しアンケート及び聞き取り調査を実施し、実践・研究のためのプラットフォームの要件について、明らかにする。

(3) (1) の活動への発表・報告を募り、各現場(学校・地域等) で行われている実践、及び研究成果を収集し、その取り組みやテーマの動向を分析する。その結果から、「多文化背景の子どもの日本語教育」に関する課題を構造化して捉えるとともに、関連領域の先行研究の検討を通して、その達成のための基軸となる考え方を枠組みとして構築する。

4. 研究成果

本研究の主たる活動である「子どもの日本語教育」、及び、課題の検討の結果については、ウェブサイトで公開しているため、その成果へのアクセス情報を示す。ここでは、(2) のプラットフォームの要件に関する成果を中心に述べる。

(1) プラットフォームのベースとしてのウェブサイト「子どもの日本語教育研究会」の運営
「子どもの日本語教育研究会」の運営とその成果は、研究会が運営するウェブサイトにおいて、実践・研究のリソースとして集積し公開している。タイプとして、実践発表・研究発表の要旨とポスター(<https://www.kodomo-no-nihongo.com/archive/>)、研究会・ワークショップなどの活動報告(<https://www.kodomo-no-nihongo.com/archive/archives/20>)、そして、本研究会で発表した実践・研究を論文・報告として再編したものをジャーナルで公開した(現在第 6 号を発行 <https://www.kodomo-no-nihongo.com/journal/archives/6>)。

(2) 実践・研究のためのプラットフォームの要件の検討

「子どもの日本語教育研究会」のイベント参加者に対するアンケートとインタビューを、エンゲストロームの活動理論モデル(エンゲストローム 2020, 山住 2020)(図 3) に基づき分析を行い、この領域における多様性・相互作用性・更新性・継続性をもつプラットフォームの要件について検討した。以下、その結果の一部として、第 8 回大会(2023 年 3 月実施) 参加者へのアンケートとインタビューの分析結果(齋藤・池上・浜田 2023) を示す。

第 8 回大会には、対面で 50 名、オンラインで 200 名弱の参加があった(申し込みは 250 名)。アンケート(回答者 127 名) からは、学校教員が最多で 27%、地域支援者 23%、日本語指導員(教育委員会等からの派遣) が 20% であった。実際に子どもを対象に日本語教育を行っている者が殆どを占める。また、「初めて」の者の比率が高い。プログラムは、実践・研究の発表(各 11 件、計 22 件)、パネルディスカッション(ICT 活用、連携)、プロジェクトの報告から構成されていた。その満足度(参考になったか) は、図 4 に示す通りであった。

この結果より、関心と学びの質を捉えると、実践・発表による各現場の実践の具体と研究知見への関心の高さが窺える。一方、テーマを巡る実践報告をもとに議論が期待されるパネルディスカッションは、いずれのテーマに関しても他のプログラムに比べれば満足度が低い。

研究会のプロジェクトBは「参加とことば」をテーマに、ヴィゴツキーの理論の紹介(解説)と、実践をその理論をもって読み解くというものであったが、参加者の満足度は高かった。この結果と記述コメントからは、新たな情報へのアクセスと、それによる実践の意味づけの展示が歓迎され、問題解決過程に自身が挑むところまでは踏み込んでいないように見受けられる。また、本研究会の活動やウェブサイトに関する質問への回答では、実践と研究の両方があることが高く評価された。一方、提供しているリソースやジャーナルには、参加経験のある者からのアクセスが多いが、初めての参加者には提供があることさえ認識されていなかった。アンケート結果からは、プラットフォームとして見た本研究会の活動は、多様性・継続性は実現されつつあるが、相互作用性・更新性に関しては、十分とは言い難い。

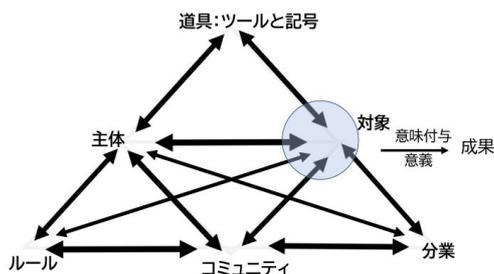
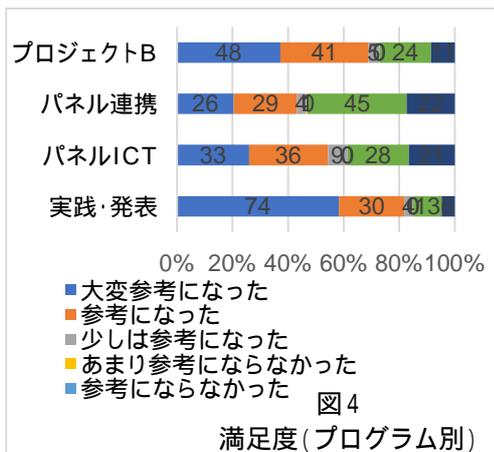


図3 活動システムの一般モデル
(Engestrom, 1987 山住訳)



半構造化インタビューの分析結果からは、「子日研」が果たしている機能について、次のような発言が見られた。多様性と相互作用性に関する評価が見られるが、更新性に関しては、今後の課題と言えそうである。

- ・子ども・目の前の学習者にしか目が向かない支援者もいる。多様な関係者が、情報を共有し繋がりを持つネットワーク構築の場(支援者)
- ・学校教員が発表できる場。発表を通して実践を振り返り、気づきを得る。研究会等は、その後に活動コミュニティが形成される可能性に価値がある。(支援者)
- ・学習言語の育成に関する実践について学べる場。教師養成の上でも現場を知る良い機会(大学教員)
- ・日本語指導担当者同士が交流する場、参考になるのは発表の要旨(学校教員)

以上の結果を活動システムに照らしてみると、本研究会では、道具を得て、その道具で対象を分析・解釈の結果を知ること、つまり、参加者各自の所与の具体的目標のために得られた道具を使ってみるという営みが展開していると解釈できる。実践や所属組織のシステムやビジョンに関わる「なぜ」という根本的な問いに迫る拡張に向かう学習サイクルは形成されていない。参加者(主体)が、直面する困難や内包する矛盾に気づき、その解決のために新しいコンセプトや実践形態を生み出す場を創ることが課題である。本研究会の活動はイベントごとの一時集型のプラットフォームという性質をもつが、課題達成には、参加の仕方に「分業」と「ルール」を模索し、コミュニティとして個人の学びに協働的介入をする必要がある(齋藤・池上・浜田 2023)。

(3) 課題の構造化とその基軸となる基本概念の検討

ことばの発達と社会参加に関する課題の検討

日本語を第二言語として学ぶ子ども、特に日本で生まれ育った子どもたちのことばの発達と社会化に関する研究を行った(齋藤 2017, 李・浜田 2021)。日本語・母語の言語使用、日本語の語彙・作文力の発達に関する調査を行い、その研究成果から、2世代の子供たちへの日本語教育の実践に関する提案を行ってきた。子どもの社会化と言語発達との関係や、語彙・読み書きの力の発達を促すための実践を検討する上で、示唆となっている。

さらに、「ことばと参加」をテーマとしたプロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトでは、公開読書会などの活動を通して関連文献のレビューを行い、ことばと参加の係りに着目して日本語教育場面のエピソードを分析する試みを重ねてきた。その成果は、「子どもの日本語教育研究会」の大会で発表したり、文献レビューの報告をウェブサイトで公開したりしている。

以上の検討結果を基に、子どもの日本語教育研究の新たな枠組みの構築を探索している。

②子どものことばの教育に関する実践研究における課題の把握

本研究会でのワークショップ等を通して、ことばの教育実践を他者に伝え、共有して実践を振り返る活動を継続して行い、その過程を分析し、成果として公表してきた(池上 2017, 菅原 2018, 齋藤・村澤 2019)。その結果、実践を報告する側は、実践を記述する過程を内省し、他者との共有によって新たな分析視点を獲得していることが明らかになった。一方、参加する実践者の関心は、具体的な指導方法や教材の共有、つまり所与の道具の利用に留まる傾向も見られた。

国内の外国人児童生徒等の地域支援の実態に関する課題の把握

本研究会はコロナ禍においては、オンラインで研究会等を実施してきたが、収穫として、対面では参加できない遠方在住者の参加が可能になった点がある。外国人住民の少ない散在地からの参加も増え、散在地域の支援状況の把握や多様な地域組織との連携によるノンフォーマルな支援の模索が求められていることが明らかとなった。プラットフォームには、散在地域の教育・支援者にとっての利便性や活用可能性の検討が求められるが、この点は、子どもの日本語教育研究会の運営委員である中川（2022）、村澤（2022）により、整理されている。

④外国人児童生徒等教育を担う教師の養成・研修に関する課題

本研究がプラットフォーム及び研究会活動を通して、多様な立場・関心をもつ者（実践者・研究者）の拡張的な学習サイクルの形成を目指す上では、多様な言語文化背景をもつ子どもたちの教育の担い手として、どのような資質・能力が求められるのかを意識せざるを得ない。この問題については、日本語教育学会が開発した文科省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム」による資質・能力モデル「豆の木モデル」からの示唆は大きい。4つの領域（捉える力、育む力、つなぐ力、変わる／変える力）の8つの課題で資質・能力を捉え、4つの力を相互に作用させながら発達させていくというこの「豆の木」モデルに照らし、本研究会に集う子どもの日本語教育に携わる教員・支援員・支援者の力量形成のための研修・養成について、課題を把握し、その解決に向けた提案を行った（齋藤他 2020、浜田 2021、齋藤 2022）。

<引用・参考文献>

- ・荒巻重人他編、齋藤ひろみ他著（2017）「日本語教育 社会参加のための「ことばの力」を育む」『外国人の子ども白書』、明石書店、118-120。
- ・池上摩希子（2017）「実践を読み解く 歴史の中で公共日本語教育学を考える」川上郁雄（編）『公共日本語教育学 社会をつくる日本語教育』156-157、くろしお出版
- ・池上摩希子・いじょんみ・小島佳子（2017）「「教える／教えられる」関係を越える教室」『実践を読み解く 歴史の中で公共日本語教育学を考える』川上郁雄（編）『公共日本語教育学 社会をつくる日本語教育』、165-170、156-157、くろしお出版
- ・石井恵理子（2017）「子どもの日本語教育 - 人権としてのことばの教育」田尻英三（編）『外国人労働者受け入れと日本語教育』ひつじ書房、183 - 209。
- ・エンゲストローム、ユーリア著、山住勝広訳（2020）『拡張による学習 完訳 増補版』新曜社
- ・齋藤ひろみ（2017）「子どもの「ことばの表現力」を高める：外国人の子どもの作文分析の結果から」『教育と医学』65号、慶應義塾大学出版会、74-83
- ・齋藤ひろみ（2022）「日本語教育現場で求められる対応力 - 子どもを対象とする日本語教育・支援現場で - 」『日本語教育』181号、35 - 50
- ・齋藤ひろみ・池上摩希子・浜田麻里（2023）「「子どもの日本語教育」の実践・研究コミュニティの構築 - 研究会活動のプラットフォーム化から - 」第42回異文化間教育学会発表要旨（ウェブサイト）
- ・齋藤ひろみ・和泉元千春・市瀬智紀・浜田麻里（2020）「多文化社会が求める教師の資質・能力 - 外国人児童生徒等教育の担い手に焦点を当てて - 」『子どもの日本語教育研究』第3号、1-17
- ・齋藤ひろみ・菅原雅枝（2017）「外国人児童生徒等教育を担う教員の「加配」 制度をめぐる諸課題」『都市問題』第108巻、第9号、公益財団法人 後藤・安田記念東京都市問題研究所、15-21、
- ・齋藤ひろみ・村澤慶昭（2019）「第4回ワークショップ WS3 の報告 - 子どもたちの「ことばの学び」を描く - 実践の言語化と共有 - 」『子どもの日本語教育研究』第2号、9-19
- ・菅原雅枝（2018）「「子どもの日本語教育研究会」に期待されること - 大会・研究会における実践・研究発表の分析を通して - 」『子どもの日本語教育研究』、108 - 123
- ・中川祐治（2022）「散在地域における地域支援の取り組み」齋藤ひろみ編『外国人の子どもへの学習支援』金子書房、64-70
- ・浜田麻里（2021）「外国人幼児に対する教育を担う教員に求められる資質・能力の検討：文部科学省モデルプログラムを踏まえて」『京都教育大学国文学会誌』49号 59-72
- ・浜田麻里・松本一子（2017）「外国人児童生徒に対する学習支援--集住地域と分散地域を比較しつつ」、『都市問題』108巻9号、公益財団法人 後藤・安田記念東京都市問題研究所、10-14.
- ・村澤慶昭（2022）「外国人の子どものためのノンフォーマル教育コミュニティの可能性」齋藤ひろみ編『外国人の子どもへの学習支援』金子書房、71-78
- ・山住勝広編著（2022）『拡張的学習と教育イノベーション』ミネルヴァ書店
- ・李如意・浜田麻里（2021）「中国人 3 歳児の幼稚園生活への適応 - 日本語発話の産出と母語使用に注目して - 」『子どもの日本語教育研究』第4号、43 - 62

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計30件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 浜田麻里	4. 巻 50
2. 論文標題 教師に求められる教師意識 多様化する学習者のことばの教育を担うために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都教育大学国文学会誌	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ	4. 巻 181号
2. 論文標題 日本語教育現場で求められる対応力 - 子どもを対象とする日本語教育・支援現場で -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ	4. 巻 9号
2. 論文標題 時空を超える身体性 - ことばとともに経験を共有し創造を生み出す	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語教育実践イマ×ココ	6. 最初と最後の頁 15-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池上摩希子	4. 巻 30
2. 論文標題 【特集】子どもと日本語教育 専門家の養成・研修のあり方を実践から考える 日本語教育専門家の養成に求められるもの：「日本語教育実践研究(1)；わせだの森」の実践から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川上郁雄、池上摩希子、石井恵理子	4. 巻 30
2. 論文標題 鼎談「子どもと日本語教育；専門家の養成・研修のあり方を実践から振り返る」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浜田麻里	4. 巻 49
2. 論文標題 外国人幼児に対する教育を担う教員に求められる資質・能力の検討：文部科学省 モデルプログラムを踏まえて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都教育大学国文学会誌	6. 最初と最後の頁 72-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 李如意、浜田麻里	4. 巻 4
2. 論文標題 中国人3歳児の幼稚園生活への適応 日本語発話の産出と母語使用に注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子どもの日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋晴裕・成家雅史・小野田雄介・安部真治・齋藤ひろみ・白勢彩子・大澤千恵子・中村和弘	4. 巻 53
2. 論文標題 児童作文の評価項目の設定に関する検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『学芸国語国文学』東京学芸大学国語国文学会	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ・和泉元千春・市瀬智紀・浜田麻里	4. 巻 3
2. 論文標題 多文化社会が求める教師の資質・能力 - 外国人児童生徒等教育の担い手に焦点を当てて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『子どもの日本語教育研究』子どもの日本語教育研究会	6. 最初と最後の頁 1 - 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村中義夫・齋藤ひろみ	4. 巻 3
2. 論文標題 算数と学校行事を横断する「JSLカリキュラム」の実践 日本語指導におけるカリキュラム・マネジメントの視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『子どもの日本語教育研究』子どもの日本語教育研究会	6. 最初と最後の頁 38-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ	4. 巻 -
2. 論文標題 文化間移動をする子どもたちの「ことば」を育む国語科教育 社会的相互作用としての言語経験の場を創る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国語科教育を問い直す』全国大学国語教育学会	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李津娥・石井恵理子・林さと子・李光鎬	4. 巻 82
2. 論文標題 ディアスポラの言語、メディア、そしてアイデンティティ 日本人海外在住経験者のメディア利用とその影響を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『東京女子大学比較文化研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 49 - 86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石井恵理子	4. 巻 3
2. 論文標題 文字を獲得した少年	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『子どもの日本語教育研究』子どもの日本語教育研究会	6. 最初と最後の頁 57-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池上摩希子	4. 巻 29
2. 論文標題 実践報告: 「日本語教育実践研究(1)」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『早稲田日本語教育学』早稲田大学大学院日本語教育研究科	6. 最初と最後の頁 37-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池上摩希子	4. 巻 3
2. 論文標題 日本語も算数も - 学習支援教室「ひまわり」の10年から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『子どもの日本語教育研究』子どもの日本語教育研究会	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ビアルケ(當山)千咲・柴山真琴・池上摩希子・高橋登	4. 巻 19
2. 論文標題 複数言語環境に育つ子どもはどのように読書活動を実践してゆくのか: 社会的環境との関わりと言語をめぐる意識の変化に注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『質的心理学研究』日本質的心理学会誌	6. 最初と最後の頁 105-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山 真琴・ピアルケ(當山) 千咲・池上 摩希子・高橋 登	4. 巻 30
2. 論文標題 ドイツ居住のバイリンガル中学生の日本語作文力：日本語補習授業校通学児の 4年間の縦断的調査に基づいて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『人間生活文化研究』大妻女子大学人間生活文化研究所	6. 最初と最後の頁 958-973
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ	4. 巻 40
2. 論文標題 多様な言語文化背景をもつ生徒に対する教育の現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語教育研究 (早稲田大学国語教育学会)	6. 最初と最後の頁 62 - 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ・村澤慶昭	4. 巻 2
2. 論文標題 子どもたちの「ことばの学び」を描く - 実践の言語化と共有 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どもの日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 9 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ	4. 巻 22
2. 論文標題 JSLの子どもを対象とする内容重視の日本語教育 日本国内の実践・研究の動向から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	6. 最初と最後の頁 10 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ	4. 巻 49
2. 論文標題 書評 『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』 櫻井千穂著	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 145 - 147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ	4. 巻 7
2. 論文標題 AGORA 『イマ×ココ』フォーラム2019 実践の記述を読むことの意味 : 『イマ×ココ』って役に立つ?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語教育実践イマ×ココ	6. 最初と最後の頁 6 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田麻里	4. 巻 22
2. 論文標題 書評 西川朋美・青木由香 著 『日本で生まれ育つ外国人の子どもの日本語力の盲点 簡単な和語動詞での隠れたつまずき』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	6. 最初と最後の頁 77-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田麻里	4. 巻 18
2. 論文標題 外国人児童生徒等の教育を担う教師の養成・研修 ; 新時代に求められる資質・能力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学日本語教員養成課程研究協議会論集	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井恵理子、毛受敏浩	4. 巻 10
2. 論文標題 多文化共生社会における日本語教育の未来(特別対談)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語(アルク出版)	6. 最初と最後の頁 96 - 110
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤香代・池上摩希子	4. 巻 2
2. 論文標題 校内で教師が共に考える「勉強会」の実践 - 外国につながる子どものことばの教育を支える試みから見える教師の変容 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どもの日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 79 - 98
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ピアルケ千咲・柴山真琴・高橋登・池上摩希子	4. 巻 172
2. 論文標題 継承日本語学習児における二言語の作文力の発達過程 ドイツの補習校に通う独日国際児の事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 102-117
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田麻里・齋藤ひろみ	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語指導が必要な子どもに関する現職教員のピリーフ 影響を与える経験に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子どもの日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤ひろみ	4. 巻 6
2. 論文標題 「イマ×ココ実践」の「目標」 学び手の具体的な姿を表す	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語教育実践イマ×ココ	6. 最初と最後の頁 20-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深澤伸子・池上摩希子	4. 巻 9
2. 論文標題 タイにおける複言語・複文化ワークショップの実践 「自分を語り他者と体験を共有する場」を作り、繋げていく意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ジャーナル 移動する子どもたち - ことばの教育を創発する	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計47件(うち招待講演 11件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 齋藤ひろみ
2. 発表標題 外国人の子どもに対する言語教育 学校における外国人児童生徒等への日本語指導の焦点を当てて
3. 学会等名 日本語学会 2022年秋大会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・見世千賀子・武内博子
2. 発表標題 グローバル化で求められる高等学校段階の教育とその課題 「外国人生徒教育」に見る包摂性と公正性から
3. 学会等名 異文化間教育学会第43回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・武内博子・南浦涼介
2. 発表標題 高等学校における外国人生徒等への日本語教育の現状と課題 質問紙調査の結果から
3. 学会等名 日本語教育学会2022年春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・衛藤景太・田所希衣子・能城黎・川上さくら・米本和弘
2. 発表標題 ICTを活用したことばの教育-子どもへの日本語・教科学習支援における実践的展開から
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第8回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 工藤聖子・武内博子・見世千賀子・齋藤ひろみ
2. 発表標題 高等学校における日本語指導の取り組み 学校設定教科・科目に着目して
3. 学会等名 東京学芸大学国語国文学会令和5年度大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大菅佐妃子・中川祐治・山田拓路・浜田麻里
2. 発表標題 多様な言語文化の背景を持つ子どもの成長を育む環境づくりの新展開 連携の「いま」と「これから」
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会 第8回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内田千春・小川珠子・河野あかね・立山愛・櫻井千穂・齋藤ひろみ・高橋美奈子・浜田麻里
2. 発表標題 子どもの「参加」を支えることばの力とは何か あらためて「学習言語」を問い直す
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会 第8回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 深澤伸子・西島阿弥子・池上摩希子
2. 発表標題 「継承日本語教育」を問い直す バンコクの親子日本語教室の実践事例から
3. 学会等名 韓国日本語学会第46回国際学術発表大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浜田麻里・齋藤ひろみ
2. 発表標題 オンラインを活用した外国人児童生徒等教育担当者研修の内容構成 教師の経験の多様性に着目して
3. 学会等名 異文化間教育学会第42回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀直予・島村学・左近健一郎・伊東浄江・齋藤ひろみ
2. 発表標題 高等学校における外国人生徒等教育の現在 定時制高等学校における日本語等の学習支援・キャリア支援の取り組みから
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第7回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・高橋美奈子
2. 発表標題 子どもの日本語教育のエージェンシー形成 大学院生と地域支援者による学び合い
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第7回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石井恵理子
2. 発表標題 日本語教育・学習体制をいかに整備すべきか ～外国にルーツのある子どものことばと学びを支える～
3. 学会等名 (一社)大学女性協会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田容次・浜田麻里・金森克浩・丹羽登・梅田真理
2. 発表標題 特別な配慮を必要とする児童・生徒への指導・支援のための教育情報に関する研究：都府県教育委員会担当者への聞き取り調査から
3. 学会等名 日本教育情報学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浜田麻里
2. 発表標題 外国にルーツをもつ子どもの在籍校の学校改革における管理職教員の役割 インタビュー調査からの示唆
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第7回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石井恵理子
2. 発表標題 国内における年少者日本語教育と母語・継承語の育成 現状と課題
3. 学会等名 バイリンガル・マルチリンガル (BMCN) 子どもネット研究会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・和泉元千春・市瀬智紀・菅原雅枝・中川祐治・浜田麻里
2. 発表標題 教育委員会との連携による「外国人児童生徒等教育」担当教員研修 文部科学省「モデルプログラム」を活用して
3. 学会等名 令和2年度日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 浜田 麻里・金田 智子・市瀬 智紀・河野 俊之・齋藤 ひろみ
2. 発表標題 外国人児童生徒等教育を教員養成に位置づける 文部科学省委託全国調査の結果から
3. 学会等名 日本教師教育学会第30回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市瀬智紀・齋藤ひろみ・浜田麻里・中山あおい
2. 発表標題 外国人児童生徒等担当教員の内省を促す研修 - ピリ - フの意識化と実践の読み解きを通して -
3. 学会等名 第41回異文化間教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・和泉元千春・市瀬智紀・浜田麻里
2. 発表標題 多文化社会が求める教師の資質・能力 - 外国人児童生徒等教育の担い手に焦点を当てて -
3. 学会等名 日本語教育学会2020年度春季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好大・齋藤ひろみ・菅原政枝
2. 発表標題 日本生育外国人児童の1年時の作文力 出来事作文の内容と構成の分析から
3. 学会等名 日本語教育学会2019年春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・浜田麻里・菅原雅枝・和泉元千春・市瀬智紀・河野俊之・川口直巳・中川祐治・仲本康一郎・中山あおい
2. 発表標題 文化間移動をする子どもの教育を担う「多文化教員」の研修 - 文部科学省「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」における検証事例から
3. 学会等名 異文化間教育学会第40回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 市瀬智紀・齋藤ひろみ・中山あおい・浜田麻里
2. 発表標題 多様な言語文化背景をもつ子どもの教育 - 人材育成における「特別視しない」という壁
3. 学会等名 日本国際理解教育学会第29回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齋藤ひろみ
2. 発表標題 多様な言語文化背景をもつ生徒に対する教育の現状と課題
3. 学会等名 早稲田大学国語教育学会（280回大会）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田千春・齋藤ひろみ
2. 発表標題 就学前の外国籍児童・親子へのプレスクール教室の実践による家庭の文化資本の発掘
3. 学会等名 2019年度MHB研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田千春・齋藤ひろみ
2. 発表標題 子どもの複言語発達を保障する保育・教育に求められる専門性の検討
3. 学会等名 日本教師教育学会第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 工藤聖子・左セツコウ・齋藤ひろみ
2. 発表標題 日本生育外国人児童の低学年時作文の縦断的分析 「～て」節に着目して
3. 学会等名 子どもの日本語教育学会第4回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 土屋晴裕・成家雅史・安部真治・中村和弘・大澤千恵子・白勢彩子・齋藤ひろみ
2. 発表標題 児童作文の評価項目に関する予備的検討
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田美桜・齋藤ひろみ
2. 発表標題 外国人児童を対象とするインクルーシブ教育の可能性 小学校の日本語教室と在籍学級の参与観察を通して
3. 学会等名 子どもの日本語教育学会第5回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白勢彩子・齋藤ひろみ・大澤千恵子・土屋晴裕・成家雅史・安部真治
2. 発表標題 児童作文の評価システムの構築 - 紹介文をテーマとして -
3. 学会等名 第44回社会言語科学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浜田麻里・和泉元千春・仲本康一郎他
2. 発表標題 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成 文部科学省委託事業の成果から
3. 学会等名 日本教育大学協会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三好圭・浜田麻里・田中 宝紀・今澤梯
2. 発表標題 新時代における外国の子どもの教育人材に求められる資質・能力を考える
3. 学会等名 大学日本語教育養成課程研究協議会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浜田麻里・河野俊之
2. 発表標題 外国人児童生徒等教育の研修担当者を育成する 「外国人児童生徒等教育を担う 教員の研修・養成モデルプログラム」を活用して
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第 5 回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井恵理子
2. 発表標題 多言語環境にある子ども達の受け入れ状況に関する調査2019 <中間報告>
3. 学会等名 バイリンガル・マルチリンガル（BMCN）子どもネット研究会（2019年度）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齋藤ひろみ
2. 発表標題 教室のマイノリティとしての外国人児童生徒の視点から考える国際理解教育
3. 学会等名 第28回日本国際理解教育学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤ひろみ
2. 発表標題 文化間移動をする子どもたちの「ことば」を育む国語科教育 社会的相互作用としての言語経験の場を創る
3. 学会等名 第134回全国大学国語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・菅原雅枝
2. 発表標題 学校教員の意識変容を促す日本語指導研修 参加者の期待とピリーフの調査から
3. 学会等名 日本語教育学会2018年春季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅原雅枝・齋藤ひろみ
2. 発表標題 外国人児童の「意見文を構成する力」の発達 小学6年生の作文の分析を通して
3. 学会等名 日本語教育国際研究大会（ICJLE）2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 浜田麻里・金田智子・齋藤ひろみ・宇佐美洋
2. 発表標題 日本語教師の成長を促す「方法」について考える 3つのアプローチから
3. 学会等名 日本語教育国際研究大会（ICJLE）2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤ひろみ・伊東祐郎・浜田麻里・各務眞弓・山崎準二
2. 発表標題 外国人児童生徒等教育を担う教員・支援員の資質能力の育成
3. 学会等名 日本教師教育学会 第28回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松原マリナ・高見成幸・今井むつみ・齋藤ひろみ
2. 発表標題 多様な言語文化背景をもつ子どもたちの「考える力」を育む 日本語と教科の学習支援を通して
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第3回研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川祐治・和泉元千春・仲本康一郎・齋藤ひろみ
2. 発表標題 「文化間移動をする子どもの育ち」を支える教育人材の育成
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第4回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池上摩希子
2. 発表標題 社会とつながる日本語教育を実践する人材を育成する試み - 修士課程での教育実習を事例として -
3. 学会等名 日本語教育国際研究大会（ICJLE）2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中宝紀・小島祥美・宮崎幸江・石井恵理子・阿部新
2. 発表標題 日本語教員養成の新しい役割と可能性 日本語指導が必要な子どもたちを取り巻く学習環境を手がかりとして
3. 学会等名 日本語教育学会2018年度春季大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井恵理子・桶谷仁美・嶽肩志江
2. 発表標題 外国につながる子ども達の支援グループと行政機関との連携に関する調査
3. 学会等名 バイリンガル・マルチリンガル子どもネット研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井恵理子
2. 発表標題 日本語教育の推進 理念、方法、意義
3. 学会等名 東海日本語ネットワーク 日本語ボランティアシンポジウム2018（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井恵理子
2. 発表標題 地域日本語教育力をめぐって
3. 学会等名 大阪府識字・日本語学習シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井恵理子
2. 発表標題 家庭における少数派言語文化の継承 ことばと文化の豊かな継承に向けた親の工夫と、親への支援
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 齋藤ひろみ編著、池上摩希子・浜田麻里他著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 112
3. 書名 外国人の子どもへの学習支援	

1. 著者名 西川朋美編著、窪津宏美・櫻井千穂・池上摩希子・齋藤ひろみ・バトラー後藤裕子・中石ゆうこ・高橋朋子著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 199
3. 書名 外国につながる子どものための日本語教育	

1. 著者名 異文化間教育学会編、齋藤ひろみ編著、池上摩希子・浜田麻里他著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 異文化間教育事典	

1. 著者名 教育の未来を研究する会編、齋藤ひろみ他著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 最新教育動向2023 必ず押さえておきたい時事ワード60&視点120	

1. 著者名 教育課題研究会代表石塚等他多数 齋藤ひろみ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 -
3. 書名 教育課題解説ハンドブック組織マネジメントから危機管理まで「カリキュラム・マネジメント 日本語指導体制の確保・充実と指導力の向上」	

1. 著者名 大山万容・清田淳子・西山教行・浜田麻里 他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 182
3. 書名 多言語化する学校と複言語教育：移民の子どものための教育支援を考える	

1. 著者名 小島祥美編著 中島和子・大貫大輔・齋藤ひろみ他著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 Q&Aでわかる外国につながる子どもの就学支援 「できること」から始める実践ガイド	

1. 著者名 教育課題研究会代表 石塚等 他多数（齋藤ひろみを含む）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 1962
3. 書名 教育課題解説ハンドブック 組織マネジメントから危機管理まで（図書コード1111764-00-000）	

1. 著者名 村田 晶子・中山 京子・藤原 孝章・森茂 岳雄・齋藤ひろみ他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ書店	5. 総ページ数 112
3. 書名 チャレンジ！多文化体験ワークブック：国際理解と多文化共生のために	

1. 著者名 石井正己・高田桂子・野村敬子・大澤千恵子・馬場英子・金廣植・坂田貞二・小川正人・君塚仁彦・崔仁鶴・虎頭恵美子・須佐多恵・荻野文隆・細川太輔・齋藤ひろみ・人見泰弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 217
3. 書名 世界の教科書に見る昔話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>子どもの日本語教育研究会 https://www.kodomo-no-nihongo.com/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	濱田 麻里 (HAMADA Mai) (80228543)	京都教育大学・教育学部・教授 (14302)	
研究分担者	池上 摩希子 (IKEGAMI Makiko) (80409721)	早稲田大学・国際学術院(日本語教育研究科)・教授 (32689)	
研究分担者	石井 恵理子 (ISHII Eriko) (90212810)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関